

中国の風俗習慣と宗教活動：摩梭人の母系制を中心に

金縄, 初美
西南学院大学大学院

<https://doi.org/10.15017/2340967>

出版情報：九州人類学会報. 30, pp.99-105, 2003-07-05. Kyushu Anthropological Association
バージョン：
権利関係：

中国の風俗習慣と宗教活動 —摩梭人の母系制を中心に—

金縄 初美

(西南学院大学大学院)

I. はじめに

今日中国において、少数民族独自の文化を保護する政策がとられている。しかし国民の98%を占める漢民族の少数民族居住地区への移住やテレビ等のマスメディアの影響により、少数民族が漢族の生活習慣の影響を受けるいわゆる少数民族の「漢化」が進んでいることから、少数民族独自の文化は一方向的に失われていく存在だと捉えられることが多い。しかし少数民族の長年維持されてきた風俗習慣は失われる方向に向かい続けるのみでなく、近代化する生活と平行して存在し続けるばかりか、意識的に保存しようというような新しい動きもあることに注目しなければならない。

本報告では、主に雲南省と四川省の境に位置する瀘沽湖という高原湖の周辺に居住する摩梭(モソ)人¹⁾が長年維持してきた母系家庭を基盤とする社会とそこで信仰されている宗教を例として挙げる。かつて文化大革命時には摩梭人の母系制と婚姻形態は政治的弾圧を受けたにもかかわらず、今日まで摩梭人の母系制と婚姻形態が維持される重要な要因として、家庭において互いに協力しあい効率的に分業する大家族の「集団性」が重視される。この「集団性」を維持することに対して摩梭人の宗教観念が大きな役割を持っているのではないかと考えられるが、その全体の状況を理解するために、本文では摩梭人の宗教観念を整理し、母系家庭を基盤とする社会とどのように関わっているかということについて、また観光業の開発によって変化した生活環境は摩

梭人の宗教活動にどのような影響を与えたのかを世代間の相違に注目して述べる。

II. 摩梭人の生活と宗教

摩梭人の宗教に関して述べる前に、その宗教が信仰される背景として、摩梭人の生活環境の概略を述べる。摩梭人は1999年時点で人口約5万人、居住地区は行政的には、雲南省寧滄イ族自治州永寧区、四川省塩源県、木里県等で、主に彝(イ)族や普米(プミ)族、漢族、傈僳(リス)族と雑居している。かつては納西(ナシ)族の東部方言を話す1グループと考えられていたが、摩梭人自身、母系家庭を基盤とした社会である点、チベット仏教を信仰する点などにおいて、明らかに自分たちは納西族とは異なると主張した。1990年に雲南省政府は彼らの主張を認め、摩梭人という民族が認められた。

摩梭人の生活の基礎となっているのは母系家庭であるので、先に家庭形態と婚姻形態について触れる。摩梭人の大半が母系家庭で生活しており、1996年の調査によると、全33戸の下落水村では母系家庭が23戸で69.7%、母系父系が並存している家庭は8戸で24.2%、父系家庭は2戸で6.1%となっており[和 1999: 252]、摩梭人が多く居住する村では、普米族や漢族なども母系家庭で生活する人が多い。彼らの母系家庭の特徴は以下の通り整理することができる。

- ①男女とも一生母親の家で生活をする。
- ②男は妻を娶らず、女は嫁がない「走婚(ゾウフン)」と呼ばれる妻訪い形式の婚姻を

- 行う。漢語では「走」は歩くという意味で、女性のもとに歩いて結ばれる関係なので「走婚」と呼ばれている。「走婚」は男が夜になると女性の家に通い、早朝自分の母親の家に帰り生活する。男女双方は互いに「阿注（アチュ）」と呼び合う。
- ③子供が生まれると、女方の家庭で養育されるため、父子の関係が比較的希薄である。
 - ④血の純潔を望み、配偶者は互いの家庭内に引き入れないので、家庭内には婿や嫁、姑、小姑等の関係はない母系血縁集団であり、血統・財産はともに代々女性が後を継ぐ。
 - ⑤各家庭には一般的に女性が担当する「達布（ダブ）」と呼ばれる家長がおり、家長を中心に団結している。
 - ⑥宗教儀式や大きな売買は能力のある男性が、財産管理、家事一般は女性が受け持つ等分業がはっきりしている。
- 主な生業は農業で、主にトウモロコシ・ジャガイモ・ソバなどを生産し、副業として猪・鶏を飼い、羊・馬を近くの山で放牧している。農業と家畜の世話は主に女性の仕事で、放牧は男性と子供の仕事というように、分業がなされている。近10年来、一部の地区で観光業が家計の中心になっている。

このような環境のもと、摩梭人は達巴（ダバ）教とチベット仏教を信仰している。以下各宗教の概要を述べる。

1. 達巴（ダバ）教

達巴教の宗教的職業者を達巴（ダバ）という。その信仰の根幹をなすものは、自然崇拜と祖先信仰である。チベットの本（ボン）教の影響が濃いこと、寺院がなく体系的な組織もないこと、多神を信仰しあらゆる自然現象や自然物をすべて神霊とみなすことなどの特徴において、麗江の納西族の

東巴（トンバ）教と非常によく似ている。東巴と達巴は同一のもので、方言によって呼び方が違うだけであるという説もある。しかし大きな違いは、東巴の経典は多数の象形文字、つまり東巴文字によって書かれているが、達巴の経典は32の象形文字が使われているが、ほとんどは口承である点である。

世襲制で、オジからオイ、もしくは父から子へと口承されるが、親戚のなかで達巴になりたい子供や見込みがあると思われる子供を教育して継がせる場合もある。男性のみこの宗教職能者になることができる。達巴は日頃、家で農業などの仕事をし、祈禱や祭事などがある時のみ宗教的仕事をす

る。達巴教の中で中心的な位置を占める信仰として取り上げることができるのは、自然崇拜と祖先崇拜である。自然に宿る神は実に多種に及ぶので、そのなかで最も崇拜されている「木戛拉（ムジアラ）」と呼ばれる天神と「瓦戛拉（ワジアラ）」とよばれる山神である。

天神崇拜は天上の星、風雨に対しても崇拜する。早魃になると達巴もしくはラマ僧が中心となり湖畔か井戸で経を念じ、木板に鳥、牛、猪、ノロシカ、蛇、獅子などの絵を書く。これは竜王に捧げる動物を意味し、竜王に雨乞いをし、災害を取り除いてもらうのである。

山の神は人口の繁殖や家畜の増殖、収穫の増減を支配する。彼らは山岳地帯で生活しているため、山と彼らの生活が密接に結びついているからである。山には女神、男神が分かれていて、瀘沽湖周辺に居住する摩梭人は山の女神といわれる「格姆（ガム）」女神を信仰し、毎年旧暦7月25日には皆たくさんのご馳走を準備して山に登り、線香をたき祈りを捧げ、ともに食事をし、生活の平安を願う。

祖先崇拜は父系母系が混合している。「曹都努依(サオヅヌイ)」が父系祖先で「澤洪幾幾咪(ザホンジジミ)」が母系である。摩梭の言い伝えでは、「曹都努依」と「澤洪幾幾咪」は兄妹で通婚した。彼らは7人子供を生んだが、前6人は毛だらけで山に放されたが、7番目の子は足だけに長い毛があってそれが摩梭人であるという。また「阿幾奪洛咪(アジトロミ)」はすべての氏族の女始祖であり、達巴経のなかで「阿幾奪洛咪」の経が一番長い。この祖先崇拜は母系父系両者が並存しているが、母系が中心をなす今日の摩梭人の状況を映し出すようである。祖先崇拜には偶像はないが、母屋の中に祖先を祭る場所が2箇所ある。一箇所は母屋入り口の正面で、もう一箇所は囲炉裏の正面にある石で、食事の前には必ず自分たちが食べるものと同じものを供え、時には「秋奪(チョド)」という先祖崇拜の経を念じる。

2. チベット仏教

12世紀ごろ、四川省のチベット族居住地区から木里、塩源というルートで伝えられた。11世紀以後チベット仏教は次第に各教派が形成され、だんだんと栄える局面にあり、自分の勢力範囲を拡大してさらに多くの信者を獲得するためにチベットと隣接している納西族や摩梭人が住む地区に勢力を伸ばそうとした。11世紀以後、納西族や摩梭人居住地区では、封建割拠の勢力が次第に形成された。封建社会で新しくおこった封建領主階級は宗教の力を借りて統治を維持したことによって、チベット仏教は封建主階級の支持を得て発展した。最も早く伝来した教派はサキャ派とガジュ派であるが、清代になるとゲルク派が伝来し、ゲルク派は地元の土司から保護されたので、もっとも影響力をもった。現在、摩梭人居住地区のなかで最も規模が大きい寺院は扎美寺と

いうゲルク派の寺院で、1950年ごろこの寺のラマ僧は700人おり、その半数以上は摩梭人であった。ゲルク派の僧侶には階級があり、一番トップは生き仏で、その次に寺院内部の事務的最高責任者で、摩梭人居住地区では土司の弟が受け持つことになっていた「堪布(ダンプ)」という階級である[楊1994:172-178]。

ゲルク派は土司と密接であったが、チベットの「政教一致」とはその状況を異にする。楊学政の『藏伝仏教』によると、次の4点にまとめられる。①チベット仏教は当時の土司の統治下における活動しかしていなかったため、土司統治に口出しをすることはできなかった。②摩梭人居住区のチベット仏教は僧侶の集団勢力を形成しておらず、生き仏の転生もなかったので、「堪布」以外の僧侶は群衆に対して封建統治権力を持たなかった。③寺院は一定の土地を所有していたけれども、農奴はおらず、寺院の土地を群衆に貸し出し、僧侶の生活と法会費用を維持するために地租を取っていた。いくつかの寺では差役がいたが、それは農奴ではなく、貧農であった。④寺院の役所はなく、永寧扎美寺の「堪布」は民衆が寺の利益を犯した場合、それを審議する権利をもっていたが、その他の犯罪を審議する権利はなく当地では全て土司の役所か土司所属下の総官の役所で審議され、僧侶であっても土司の統治に反対したら処罰された[楊1994:211-212]。

かつては2人以上男子のいる家は必ず一人チベット仏教の僧侶であるラマ僧になることが義務付けられ、ラマ僧は尊敬をうける職であり、家族の中にラマがいることは誇るべきことであつたし、ゲルク派はチベットでは結婚を許されないが、摩梭人居住区では「走婚」が許され、ラマ僧が走婚や婚姻の相手になることは名誉なことであるとされた。今日でも各家庭にはチベット

仏教を祭る経堂が必ずあり、経済的に豊かであれば、より色鮮やかに経堂を飾る。

III. 生活中における宗教活動

達巴教はチベット仏教の影響を受け変化した。例えば、観音菩薩、大黒天神などを受け入れ、達巴教の神にチベット仏教の神の名を付け、それに相当する役割を与えたこと、達巴が身につける五仏冠や長い上着や銅鈴などの法器はチベット仏教のものを借用していること、「祈福経」「求寿経」「驅鬼経」「火塘経」などチベット仏教の経が加わったこと、家畜を殺して備える儀式が減少したことなどである。互いに影響を受け合った達巴教とチベット仏教は日常生活や祭事のなかで互いに共存して実践されている。

例えば摩梭人の名前は生まれて2日目に達巴に生まれた時間の方角を占ってつけてもらう。しかしその子供が1歳以上になると、ラマに頼んでチベット名をつけてもらう。一般的にはチベット名を一生使う。最近では漢名も付け、学校などでは漢名を使う。

また儀式においても、達巴教とチベット仏教派同時に信仰される。葬儀の概要は以下の通りである。(2000年7月四川省木里県里加村での葬儀に参加した際の記録に基づく)

人が死亡した当日の夜、村の各家の代表である男性とラマ僧、達巴(ダバ)が集まり、火葬の日取り、式の段取り、費用の計算、役割分担などを話し合う。この場には女性は参加しない。モソ人の男女の役割分担として、宗教的事柄は男性が受け持つこととなっていること、またモソ人の間では死と男性が結びつき、生と女性が結びつきと言われていることが関係している。火葬の日取りはラマが占

いで決め、おおよそ1ヶ月後に行われることが多い。

火葬前日、死体は木で作った棺に納められる。棺は母屋正面の竈の後方に置かれる。この日祈禱にきた達巴は3人、その内2人は鎧を着て、昔の武士の格好をしている。ラマは5~6人でその内の1人は位の高い僧侶であった。客室の2階にある経堂ではラマが経を読み、棺の前で1人の達巴が経を読む。残り2人の達巴この間に中庭で洗馬の儀式に使う馬にきれいな鞍をつけ、頭部には鳥の尾をつける。

昼過ぎ、1人の達巴が棺の前で経を読む。2人の達巴は囲炉裏の側で法螺貝を吹く。親類は次々と死者の前に頭をつけて礼をする。経を読み終わると洗馬の儀式がはじまり達巴はきれいに飾りつけた馬に乗って、経を読みながら川べりに行き、茶碗に水を汲み馬にかける。馬が身震いしたら、きれいに洗うことができたということになる。この儀式では死者は馬にのって先祖のもとに帰るので、馬をきれいに清めなければならないと考えられている。達巴が馬をつれて家に戻ると、参列者は家の外で彼らを迎える。夜9時ごろになると死者の家の中庭で達巴と村の男性は魔よけの踊りをする。参加者は多く、中庭と客室の2階は参列者で埋め尽くされている。中庭で魔よけの踊りが行われると同時に客室の2階ではラマが経を読み、経は夜12時頃まで読まれる。

火葬はラマが占った時間通りに行なわれる。一般的には早朝行われる。家族が棺を担ぎ、家から歩いて20分ぐらいの山手にある火葬場までもっていく。

火葬場に着くと5人のラマが井形に組んだ火葬場の横に一列に並び経を念じている。ラマが棺の中から死体を取り出し井形の火葬場の中に入れ、井形に火をつ

ける。煙があがると、煙には霊がやどるのでこの霊が生きている人間についてはいけないといって親類数人を残してみな火葬場を離れ、それぞれの家に帰り、火葬が終わるとラマと死者の家族の男性により遺骨が山手の共同の墓地に埋められる。

以上の儀式からも見られるように、チベット仏教と達巴教は一切衝突することなく、生活に溶け込んでいる。

IV. 宗教観の変化

近10年間で摩梭人居住地区、特に落水村では観光開発が進められ、生活環境と経済環境は著しく変化した。1996年の時点では下落水村28戸のうち、16戸は自宅を改築し民宿を経営するようになった。民宿経営以外にも、観光客向けの馬引きやダンス、丸木舟での瀘沽湖周遊や外部からきた商人に部屋を貸すといった収入があり、高額の現金収入を得るようになっていた。以前は収穫前の6・7月には食料不足になっていた村も、現在落水村全ての家庭の主な収入源は観光業となり、雲南省麗江地区（雲南省東北部）で「十大富裕村」の一つになっている。雲南大学の個別家庭調査によると、落水村の苦母の家では1996年の収入は3,330元（1元=15円）、1999年では27,500元と大幅に増加している[雲南大学 2001：65]。開発は彼らの生活の豊かさと直接結びついているため、落水村では好意的に受け入れられている傾向にある。

一方地理的条件が観光業に適していない村では依然として農業以外の産業がなく、各家の収穫物に頼る生活で、食料は不足してはいないが、現金収入が少ない。貧困に苦しむ村では裕福な落水村に出稼ぎに出る者も多く、かつては経済的にも地位的にも

比較的平等であったモソ人の間に貧富の差が広がり、雇用者と被雇用者という関係も生まれている。

このような生活環境の著しい変化によって、摩梭人の宗教にも変化が生じている。その中でも今日における摩梭人の宗教、特に達巴教において最も憂慮すべき点は後継者不足ということである。2002年3月に2校の小学校高学年を対象に行なった簡易アンケートで将来の夢を尋ねると、誰ひとりとしてラマや達巴になりたいと答えなかった。その理由は尊敬を受ける職業ではあるが、収入が悪いということが主である。このような問題が生じた背景にはおおむね次の社会変化が大きく関わっていると考えられる。

1. 経済観念の変化

観光化の影響により経済観念は着実に変化している。例えばかつてはある者が家を建築する場合、大工は同じ村の人に頼み、大工の手伝いは村人が順番にするという習慣があったが、上記したように落水村では建築ラッシュが続いたことと、村民のほとんどが観光業に携わることで他人の家の手伝いまで手がまわらないなどの理由で、かつて村人は無償で手伝いあうという習慣はなくなってしまった。要するに人情よりも効率や商業化を重視する傾向が強まったのである。

仕事内容においても、かつては農業を中心としていたため、家族を中心に仕事をし、仕事の範囲は基本的に村内部に限られていた。男性は赶馬（荷駄隊を組んで各地で交易をする商売）で遠方まで商売に行くこともあったが、やはり生活の基盤は農業にあった。今日では観光や商売のために移入する外部者との接触により、外部とのコネをもった若者は外へと出て行くようになった。特に女性は以前ほとんど家から離れる

ことはなかったが、漢語が話せて性格が活発な女性を中心に家を離れて出稼ぎをする若い女性が増加した。従来は個人の収入がほとんどなかったが、個人の収入が増加し、仕事とそれに伴う収入は「集団」で分配するものから「個人」の所有へと変化している。

2. 教育の変化

中学の数が少ないので、進学する場合には中学生以上から皆学校の宿舎に宿泊する。学校では民族の歴史や風習を教えないため、自民族の文化を知らない若者が増えている。高学歴者も増加し、若いうちにさまざまな経験をしたいから早く結婚したくないと考える若者が増えさらに家から離れることが多くなった。家から離れると家庭を中心に行われていた宗教信仰からも遠ざかることになり、人々の興味関心も家庭内部のことから外部のことへと移ることになる。

以上のような経済観念や教育の変化に伴って、人々の信仰心が急になくなることはないものの、信仰に対する興味は減少していった。ある三世代同居（祖母を中心に、祖母の6人の子供、3人の孫という家族構成）の家庭を例にあげると以下の通りである。

一世代＝祖母は毎日6時に起床し、チベット仏教の仏像に礼拝し、仏像に供えた水をかえる。礼拝が済むと労働にとりかかるが、暇な時間さえあれば、数珠をまわし経をととなえ、常に数珠を身につけている。

二世代＝一日一回はチベット仏教に礼拝するが、経を常に口にすることはない。この世代は労働の中心であるため、忙しいからなのかそれともあまり興味をもっていないからなのか、さらに詳しく調べる必要がある。

三代目＝ラマが家に来て経を読むとき

や、祭事の時は礼拝をするが、普段はほとんど礼拝をしない。

達巴が現存しない村では、三代目にあたる子供たちはほとんど達巴と接触がなく、どういった祈禱をするのかさえも知らず、達巴が現存している村では、身近に達巴の祈禱に接することができるが、この村は出稼ぎに出る者が多いため、現在のところ達巴の後継者はいない。『山茶』の中で、達巴が達巴経に興味を示さない息子に対し、「彼はバイクを買うことに一番興味をもっており、達巴の継承のことなどどうでもいいのだ」[拉木・嘎吐萨 2001:69]と嘆いている現状はまさにこの世代間の宗教観の違いを表しているのではないだろうか。

IV. おわりに

—宗教活動における新たな動き—

この半世紀間において、宗教に関わる最大の打撃は政治的圧迫であった。特に文化大革命の時期にはチベット仏教寺院はすべて破壊され、一切の宗教活動は禁止された。しかしこの政治的圧迫から解放されると、また従来通り宗教活動は盛んになっていった。今日では後継者不足に悩まされていることや経済発展への強い欲望に影響を受け、さらに人々の信仰への態度は変わり、新たな側面が生まれている。

例えば国家プロジェクトである「西部大開発」でも観光資源として文革時に破壊されたチベット仏教寺院の修復などが実施され、自民族の宗教の復興として好意的に受け入れられていることや、このままでは摩梭人の思想を反映した達巴経が途絶えてしまうと危機感を持つ者（上記の事例では二世代に当たる年齢）が表れ、観光資源の増加と文化保護の2つの目的で、民俗博物館を設立した。その博物館では摩梭人の生活

をそのまま映し出そうと、彼らの住居建築がそのままのかたちで再現され、そこに生活道具などが展示されていることである。博物館設立者の今後最大の目標は、博物館に常時達巴を招いて、達巴の用いる法器を展示し祈禱のデモンストレーションをおこなうことによって、子供たちに達巴教の存在と意義を教育することだという。このまま宗教儀礼だけが切り離されたように博物館の文物としてのみ生き続けるのか、この博物館からの発信を民衆が受け止め宗教が摩梭人の生活と心理の中に生き続けるのか、現時点でははっきりと言及できないが、人々の経済観念がいつそう変化することを予想すると、かつてのような生活の中での宗教、特に達巴教の需要と供給は期待できないであろう。しかし近代化と伝統を調整するのはやはりそこに暮す人々の意識であり、その意識の根底を支えるものとして「宗教」が必要とされるのではないだろうか。今後も世代間における宗教観の相違に着目して摩梭人の宗教活動の変遷を見ていき

い。

注

- 1) 民族名の表記については、初見は漢字(カタカナ)で、以下は漢字表記のみとする。また「～人」は中国政府が公認している55の少数民族以外の民族グループに対して用いられる。

参考文献

- 和鐘華 1999『生存和文化的選択—摩梭母系制及其現代変遷—』雲南教育出版社。
- 拉木・嘎吐薩 2001「達巴—瀘沽湖最後の通靈者—」『人文地理 第1期』華夏人文地理雜誌社。
- 楊学政 1994『藏族 納西族 普米族的藏伝仏教』雲南人民出版社。
- 雲南大学組織編 2001『雲南民族村寨調査普米族—寧蒗永寧鄉落水村—』雲南大学出版社。